

平成29年生誕450周年記念 五枚胴具足着用 伊達政宗像 全高約53センチ



『独眼竜』伊達政宗、正確な考証と 高度な美術彫刻技術で再現

若千十八歳にして伊達家の家督を継ぎ、数年のうちに破竹の勢いで奥州筆頭大名へとの上がった伊達政宗。若年期より苛烈な戦いを経てその地歩を固めたことから、戦場で自ら指揮を執る颯爽たる青年武将像として制作されました。

伊達政宗は、天下人・豊臣秀吉の時代を巧みな駆け引きで生き抜き、その後も徳川家康に重用され、現在の仙台の繁栄の基礎を築きました。また、伊達隊は『大坂夏の陣』(道明寺の戦い)で、勇将 後藤基次(又兵衛)隊を壊滅させ、その後、戦国最強ともいわれた真田幸村隊と激突し、まさに戦国時代の最期を飾るにふさわしい激戦を繰り広げました。



鉄鞭を手に指揮を執る政宗

政宗公の雄姿を完全再現

鋭い鉄鞭を手にする姿は、旧態依然たる奥州に風穴を開けた政宗らしい鋭い印象を与えます。鉄鞭と弦月(三日月)の前立てには、その鋭さを表現するために、金属を用いました。

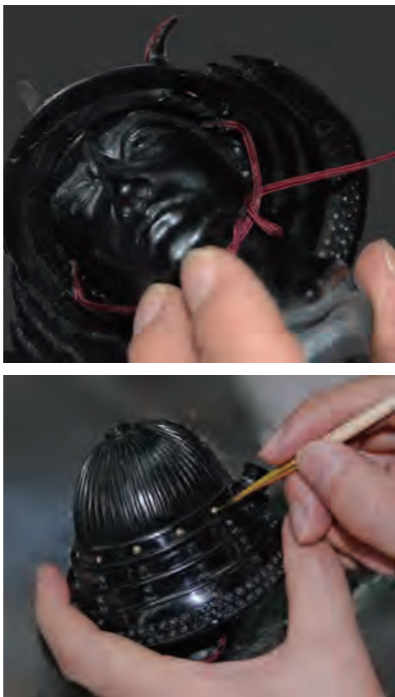


日本の鎧をまとった 武将たちの姿を後世に伝える

作家/海野 宗伯

海野宗伯は30年以上にわたり、戦国大名と戦国美術の研究を行って参りました。その戦国期の鎧研究を基とした、精巧な甲冑武将彫像を制作しています。日本の鎧は他国にない独自の美しさと機能性を備えており、防具以上の精神性を伴います。日本の武将たちは己の信条や美意識を独特な形状の兜や、黒・赤・金といった華やかな色で表現し、まさに華々しく死ぬための装束として身につけて戦場に臨みました。

目立つ装束で戦場に挑むのは、死を恐れず戦場で見事に死ぬことこそ本懐であると考え、日本武士独自の死生観に対する美学を反映しています。生殺与奪し、すべてを決める絶対的な権限をもち、自ら道を切り拓き、国をつくられた大名たち。大名たちがどのような姿かたちで戦国を生き抜いたのか、その臨場感に溢れる姿が、正確な考証と優れた造形美表現として眼前に再現されます。



▲政宗像の目には生命感を宿す輝きを再現。右目には取り外しが可能な「独眼竜」たる政宗の【眼帯】が付属します。瞳の描き入れ、また兜の装着、紐結いなどすべて手仕事で制作しております。

安土桃山の美を強く反映した軍装

全身を黒の甲冑でかため、金三日月の前立てを際立たせる装いは、安土桃山の美を引き継いだものです。本像でもその伊達の美意識の結集ともいえる甲冑装束を細部まで正確に再現しました。甲冑の漆黒、前立て(本金箔仕様)の金、陣羽織の赤と、安土桃山の美意識が色濃く反映された彩色仕上げとなります。

伊達政宗は巧みな軍事・政治の才を備え、また同時に戦国屈指の教養人としても有名です。香道・和歌・能楽に秀で、その高い美意識は「伊達者(粹でおしゃれな男性)」と称する呼び名となって現代にも残っています。伊達者とは、朝鮮出兵の上洛の際、伊達家の黒と金のきらびやかな軍装が京都人の注目を集めたことに由来します。

弦月の前立て

伊達の軍装の美しさは、漆黒の装備の中にただひとつ輝く金の三日月を押し出し、あえてその美しさを際立たせているところにあります。前立てには本金箔を用いることにより、本物の輝きを再現しました。



質感再現

本像の制作の難しさは各所の質感再現にあります。鎧と一口でいってもその素材は鉄や布、革、漆、と様々。本作は一部を除きポリストーン(人造石)という一つの素材を用いて再現するため、金属部や布、革、漆といった質感の差を特に意識し、手仕事で微妙な輝きや質感付けが与えられています。それによつてあたたかも甲冑の音さえ聞こえてくるかのような臨場感を生み出しているのです。

謙信工房とは

2015年、株式会社謙信は高品質な造形をつくることに特化した少数人数精鋭の造形工房「謙信工房」を設立しました。鎧の質感や武将のイメージを反映した芸術性の高い作品をつくることが可能となりました。

限定制作50体

少数限定、職人の手仕事

海野宗伯の厳密な指揮のもと、謙信工房では職人の手仕事で伊達武将像を少量限定制作でお届けいたします。正確な鎧、人物像の制作には、高度な技術が必要となり、成型から彩色仕上げまでその全てが宗伯の指示に基づく熟練した職人たちの「技の結晶」です。

収納・保管に最適

専用化粧箱入り

